

全国美術館会議機関誌  
全美フォーラム

ZENBI FORUM

全国美術館会議機関誌

## 全美フォーラム

ZENBI FORUM

01  
F-02

『現場で使える 美術著作権ガイド』  
改訂版を準備中  
国立国際美術館 山梨俊夫

02  
F-04

陶磁専門美術館の国際展  
大阪市立東洋陶磁美術館 小林 仁

03  
F-07

新しい美術館の開館準備報告パート2  
大阪中之島美術館 菅谷富夫

04  
F-09

二つの80年代展をめぐって  
和歌山県立近代美術館 奥村泰彦

# NISSHA

EMPOWERING YOUR VISION

## 美術品管理システム Artize MA

### NISSHA 独自のアーカイブ構築ノウハウから生まれた 収蔵作品(資料)管理のための高機能データベース

「Artize MA (アルタイズ・エム・エー)」は、NISSHA の高級美術印刷への豊富な取り組み経験やデジタルアーカイブ構築ノウハウから生まれた「収蔵作品管理」「収蔵資料管理」のための高機能データベースシステムです。



#### 豊富な基本機能と柔軟なカスタマイズ

あらゆる美術館・博物館の作品管理業務への対応を考え、豊富な機能を基本パッケージに盛り込みました。個別ニーズに合わせたカスタマイズにも柔軟に対応でき、短期間でスピーディなシステム導入が可能です。

#### ユーザーごとのアクセス権限を詳細に設定

ユーザー管理画面から利用者のアクセス権限や作品情報の公開・非公開が設定可能。貴重な情報のセキュリティー保持も万全です。

#### 高精細な作品画像を専用ビューアで閲覧

「Artize MA」に登録された作品画像は、専用的高精細ビューアで見たい部分を自由に拡大表示できます。

#### 来館者用端末やインターネットを通じて

##### 広く収蔵作品を公開

非常に簡単な操作で、「Artize MA」に登録されている作品情報を、セキュリティーを保ちつつネットワークを経由して公開することができます(インターネット情報発信機能を標準搭載、Webサーバーはオプション)。

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

<http://artize.nissha-comms.co.jp/>

京都本社 (担当: 和田) 604-8551 京都市中京区壬生花井町3 075(823)5151

大阪支社 (担当: 石濱) 541-0047 大阪市中央区淡路町1-7-3 日土地堺筋ビル 06(6232)2714



# 『現場で使える 美術著作権ガイド』 改訂版を準備中

山梨俊夫

Toshio Yamanashi (国立国際美術館)

2011年2月10日を発行日にして、全国美術館会議（以下、全美）は『現場で使える美術著作権ガイド』を出版した。それから現在に到るあいだに、著作権法は2度改正され本年の年初からさらなる改正が施行されている。法改正があり、ここ8年ほどでも美術自体が、とくに映像領域で激しく変化している状況に鑑み、さらに「現場で使える」便宜を図るために現状に対処していかねなければならぬ。幸い初版は好評で、重版をしたものも売り切れて在庫がない。現状に即した改訂を加えるなら、昨年末にTPPも発効したいまが適当であろうと判断し、2018年5月の理事会及び総会で承認を受け、改訂版刊行の準備に入っている。現況を簡単に報告しておきたい。

まず旧版にまつわる若干を説明しておく。『美術著作権ガイド』は全国美術館会議編と印されているが、実際的な編集作業は美術館運営制度研究部会が担当した。執筆者は、甲野正道氏と小生の連名となっている。小生は「第2部 作品寄贈の対処」を担当し、同書の大半を占める著作権に関わる部分は、甲野氏が全部を執筆された。甲野氏は、当時、国立西洋美術館副館長で、全美前会長の青柳正規館長の下で全美の事務局長をなさり、西洋美術館に勤務される前には、文化庁の著作権課長であった。当時、小生を含め現場の美術館員たちには著作権についての知識がほとんど蓄積されていないことを痛感し、著作権ガイドを作りましよう、と理事会で発案し了承されたが、さて、執筆者となると現場を知り、著作権法にも精通している人間が必要になる。いっそのこと自分で書こうかと思ひ、著作権法を一通り読んでみた。め

まいを起こしただけで、とても手に負えないと思ひ知らされた。何をぼんやりしていたか、すぐ傍らに、前著作権課長の甲野さんがいるではないか。早速甲野さんに事情を説明し、書いてくれませんか、とお願ひしたところ、喜んで書きましようとの快諾を得た。そこに到るまでもいろいろあつて、結構時間もかかっていたが、かいつまんで言えば、そういう事情で原稿作りに取り掛かった。Q&Aをつけましよう、と甲野さんから発案で、著作権に関して日常的な対処で迷う点などの質問事項を、全美会員館に広く募った。また甲野さん自身が美術著作権協会に取材し、各種の使用料表なども作成された。部会員は原稿が出来上がるのをほとんど座して待ち、甲野さんは著作権に詳しい弁護士も受けて原稿を仕上げ、出版を引き受けてくれた出版社ブリュッケに入稿した。部会員は校正作業を手分けした。誰もが忙しいなかで、校正に時間を割いてくれた部会員各位の労を多ししなければいけないが、『美術著作権ガイド』の初版はひとえに甲野正道氏の多大な労苦に負っている。

さて、初版が刊行されてから、著作権法は、2度に亘って改正されている。さらに、2019年1月1日から施行される改正を含めれば、3度となる。このうち2012（平成24）年の改正では、5項目あるうちで美術と直接関わるのは、「違法ダウンロードの刑事罰化に係る規定の整備」。また2014（平成26）年の改正の2項目のうち「視聴覚的実演に関する北京条約の実施に伴う規定の整備」が、美術館内でパフォーマンス上演が多くなっている最近の美術状況では関係することが多いだろう。そして、2018（平成30）年5月に成立し、2019年1月1日から施行される最新の改正では、4項目が挙げられ、とくに情報のデジタル化・ネットワーク化に関わる画像の処理に関連する事項は美術館での活動に大いに関係する。たとえば、サムネイルと呼ばれる小さな画像をコンピュータ上で著作権者の許諾なく使用できる規定が明記されている（まったく無制限ではない）。大きな基本は以前と変わらないとしても、こうした種々の法改正で生じる新たな諸点は、改訂版『美術著作権ガイド』で説明されるので、詳細は改訂版刊行を待ちたい。

## 陶磁専門美術館の国際展

そのことと同時に、新世代が新しい考え方のもとに既存の枠組みを広げる活動を続ける美術自体の変容に伴って、パフォーミング作品、権利者が複雑な映像作品などに関して、「作品」の貸借、展示、保管等で対処に戸惑う場面も見受けられる。改訂版では、そうした美術領域に絡んだ新たな問題についても言及されていく。また、一方で著作権者の権利処理を代行する諸団体の組織変更等の情報も併せて提供していきたいと考えている。また今回も、日頃意識されている著作権がらみの問題をQ&Aに取り込もうと、部会員を中心に質問事項を募った。

今春の刊行を目指し、甲野氏に再度、執筆をお願いして、美術館運営制度研究部会が編集作業を担い目下準備を進めている。美術館員一人ひとりが手元に置けるよう、出版元の美術出版社と相談し、できるだけ価格を抑える方策を探っている。なお、改訂版では旧版の「第2部 作品寄贈の対処」を削り、美術著作権に焦点を絞ったガイドとしていく方向で準備が進められていることを付言しておく。

小林仁

Kobayashi Hitoshi (大阪市立東洋陶磁美術館)

展覧会の企画・実施は学芸員の仕事の醍醐味である。制約や苦労が多い中、独自の工夫が各館の腕の見せ所であろう。当館は陶磁専門美術館として、常設展に加え、様々な独自企画の展覧会を開催してきた。2010年度から利用料金制が導入された当館では、特別展・企画展の展覧会事業費は基本的に入館料でまかなう形となった。デザインなど広報物の工夫、展覧会収入の見込める西洋陶磁展等の開催、そして協賛金の獲得など収支バランスを保つ工夫に努めながら、世界的な陶磁専門美術館たるに相応しい質と内容の独自企画展の開催に努力している。

筆者がこれまで企画・担当してきた中国の窯址発掘の最新成果を紹介する展覧会シリーズは「国際交流特別展「北宋汝窯青磁―考古発掘成果展」(2009年)、国際交流企画展「幻の名窯南宋修内司官窯―杭州老虎洞窯址発掘成果展」(2010年)、国際交流企画展「定窯・優雅なる白の世界―窯址発掘成果展」(2011年)、「定窯・優雅なる白の世界」(2013年)」、専門的な内容に加え、展示品はすべて出土の破片資料であった。考古発掘資料を美術品として見せる展示方法など中国側関係者の目にも新鮮に映ったようで、国内外で高い評価を得た。こうした展覧会は館蔵品に関する新知見をもたらすものであり、館蔵品の価値とその魅力を再認識、再発見する絶好の機会を提供した。2016年には北宋汝窯青磁水仙盆をテーマとした展示点数6点の特別展「台北 國立故宮博物院―北宋汝窯青磁水仙盆」を開催した<sup>1)</sup>。これは世界的に稀少な汝窯の水仙盆を所蔵する当館ならではのユニークな企画で、自然光に近い照明により作品の美しさを最大限引き出す展示方法や豪華図録など、世界トップレベルの内容であったと自負している。

これらの展覧会はいずれも当館と所蔵機関との長年にわたる学術交流や研究成果に基づいたものであり、館蔵品研究の延長線上に実現したものであった。特筆すべきは、企画立案から作品選定、所蔵機関等との出品交渉、事前調査、協議書の締結などすべて館独自で行っていることである。さらに、図録は当館が編集し、ISBNを取得している当館が発行するのが基本である。図版用写真の新規撮影や展覧会ビデオ用の映像撮影も担当者として立ち会った。大規模館の特別展や巡回展とは異なり、いずれも当館が単独で主体的につくりあげた、完全独自企画の国際展なのである。

2017年に開催した特別展開館35周年記念・日中国交正常化45周年記念特別展「唐代胡人俑―シルクロードを駆けた夢」もそうした当館独自企画の展覧会であった。本展で紹介した甘肅省慶城県の穆泰墓(730年)出土の胡人俑は、筆者がかつて中国で初めて目にして強烈な印象を受けた。その迫真的な表現力と芸術性の高さは、唐代胡人俑の最高傑作と呼ぶにふさわ



図1  
特別展  
「台北 國立故宮博物院―北宋汝窯青磁水仙盆」  
ポスター

しいものと確信した。2012年、当館所蔵の伊万里磁器の中国巡回展「江戸名瓷 伊万里展」が甘肅省博物館を皮切りにスタートしたのが縁で、甘肅省とは友好関係を築いていたこともあり、まだまだとまって海外で紹介されたことがなかった穆泰墓出土の胡人俑を紹介する展覧会を企画した。甘肅省文物局と所蔵先の慶城県博物館の全面的な協力を得て、穆泰墓の胡人俑等約60点を日本で初めて紹介することになった。穆泰墓の胡人俑は、インパクトのあるユニークな表情や姿態で多くの来館者を魅了した<sup>図2</sup>。本展に併せて、館蔵品による特集展「中国陶俑の魅力」と、国立国際美術館所蔵の現代の人物彫刻約10点を紹介する連携企画、国立国際美術館開館40周年記念連携企画「いまを表現する人間像」展を同時開催した。後者は、国立国際美術館開館40周年記念として企画され、当館では初の現代彫刻作品の展示となった。時代、地域、ジャンルを超えた視点での展示は世界的な潮流になりつつあるようだが、当館でも東洋古陶磁に限らず近現代陶磁や陶磁以外のジャンルとのコラボレーションにも積極的に取り組み始めたところである。安易な「並置」に陥らないようにすることが最も難しい点であるが、古陶磁の新たな魅力の発見という点でもこうした視点は効果的と考える。実際、約1200年前の唐代の胡人俑が、全く異なる目的や背景においてつくられた現代の美術作品と対比化されることで、その斬新な造形感覚が一層際立ち、現代美術以上に現代的な一面が浮かび上がった。

本展では中国側から代表団3名、随員4名が来日した。所蔵先の慶城県博物館は単独での海外展は初めてという地方博物館であったが、同館の賀興輝館長は当館の展示方法などにも強い関心を示し、帰国後に陶俑展示室の大規模改修にさっそく取り組むなど本展が中国側にも大きな刺激となった。出品された胡人俑は地方博物館の所蔵品ではあるが、その芸術的価値の高さを日本のみならず中国国内においても知らしめる上で大きな役割を果たしたといえる。館蔵品研究や国内外の研究機関との学術交流を進展させながら美術館の新たな活力につなげていく上で、こうした独自企画の国際展は専門美術館である当館にとって極めて重要な生命線といえる。



図2  
特別展  
「唐代胡人俑—シルクロードを駆けた夢」  
ポスター

## 03 新しい美術館の開館準備報告パート2

菅谷富夫 Tomio Sugaya (大阪中之島美術館)

大阪市の新しい美術館も2017年2月に設計コンペにより設計者が決定して以来、2021年度末の開館に向けて準備は順調に進んでいる。開館が決まった時点での美術館の概要については以前にも本誌面で伝えたが、今回はその後の進捗状況と開館後に予定されている運営手法であるPFI（コンセッション方式）について報告させていただく。

まずは建設に関する進捗であるが、新設美術館の開館に携わった方は、存じであろうが、設計者がコンペで決まった後に基本設計、実施設計、それに基づく施工業者の入札と続く。基本設計、実施設計の中で、我々学芸員の要求（希望）は現実的な形を取っていくわけであるが、それは同時にいろいろな条件の整合性を取っていくなかで優先順位をつけ、取捨選択するという作業でもあった。その成果もあってか12月初めには建設事業者を決める入札結果が発表され、無事決定することが出来た。今後は市議会の承認を得て、今年度末3月中の着工を目指す。

資材費や人件費が高騰する中、各地の美術館に関する建築入札が不調に終わり、設計変更や計画変更を迫られるニュースが、数年続いていた。当館もそのような事態になれば半年以上のスケジュールの遅れは避けられないため、私たちも設計段階でかなり精査してきたとはいえ決定するまではヒヤヒヤであった。大阪では2025年の万博も決まり今後は建設費の高騰が予想される。全国的に見れば2020年の東京オリンピック・パラリンピックと大阪万博の間に入った当準備室はラッキーだったのかもしれない。

ハードの整備が進むとともにソフトも進んでいる。10月18日には正式な館名が「大阪中之島

美術館」とすることが発表され、11月から準備室も大阪中之島美術館準備室になった。公募によって一般の方々から1681件の案が寄せられ、外部有識者の検討を経て市長が決定した。1990年4月に大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室として発足し、大阪新美術館建設準備室を経て、今回、正式名称が決まったわけである。

もう一つ公募プロポーザルが進行している。ヴィジュアル・アイデンティティーを担当するデザイナーの募集である。新しい美術館のロゴ、シンボルマークはもちろん、館内の案内表示、グッズへの展開など、館のヴィジュアル全体を統括的にコントロールするデザイナーの募集である。現在、応募はすでに締め切られ、年度末の決定に向けて手続き・選考が進んでいる。

その他にも開館以降の展覧会準備はもちろん、作品の引っ越し準備等、諸々の準備も進んでいるが、現在もつとも難関なのは運営を担うPFI (Private Financial Initiative) 事業者の募集準備である。来年度中には民間事業者を選考し、契約をする予定である。現在はPFI事業の実施方針(案)を公表したところであり、(当準備室のホームページを)ご覧いただきたい)一般的にPFIというと建築を建てて運営も行うことが多いと思われるが、今回の場合は、建物は大阪市が公共事業として建築し運営のみPFI方式で行うことになった。運営型PFIである。またPFIの中でも民間事業者の裁量の幅が広いコンセッション方式を採る。これは日本の美術館では前例のない初めての試みではないだろうか。

コンセッション方式は運営権を設定するのが特色で、空港の運営等に最近よく使われる手法である。選ばれた民間事業者は指定管理とは違って自ら出資して美術館を運営する。しかし美術館という施設の性格からして黒字になる可能性はなく、それでは引き受ける民間事業者は現れないだろう。そこで清掃や警備など工夫の余地があまりない費用に相当する分は「サービス対価」として、大阪市の美術館・博物館5館+1準備室を傘下にもつ地方独立行政法人大阪市博物館機構から支払われる。民間事業者はそれ以外の事業費を自ら負担し、そのかわり収入をすべて直接受け取る。事業費には展覧会の予算はもちろん、講演会、ワークショップなどの教育普及事業や各種イベントなども含まれる。レストラン、カフェやショップなどの飲食・物販の事業も、民間事業者が内装などを投資して経営する。これらの事業は従来の公立美術館にはできない民間の手法によって多くの集客が期待できる。結果としてより効果的で収益性の高い運営が行われることになるだろう。民間事業者にすれば頑張り次第では黒字化⇨収益増も可能ということになる。

美術館のメイン事業である展覧会については現在の準備室学芸員が民間事業者に出向する形で担当するので、展覧会の質や作品の扱いについての心配もない。また社会教育施設としてしなければならない事業についても、事前の要求水準書で示して契約することで縛りをかける。

私たちがこの手法を採用したのは、従来の公立美術館の運営にはない柔軟でスピード感のある運営でしか、これからの大型美術館の運営はできないのではないかと思うからである。美術館のサービス力を上げ持続可能な美術館運営をするためにも、これから3年間この手法の内容をより充実させて用意万端な体制で開館を迎えられるようこれからも準備を進めていく。

# 04 二つの80年代展をめぐって

奥村泰彦 *Yasuhiko Okumura* (和歌山県立近代美術館)

1980年代を主題とする二つの展覧会が開催されている。「起点としての80年代」と「ニュー・ウェイブ 現代美術の80年代」である(註1)。自分が体験してきた時代の出来事を客観的に歴史化し、評価することができるものかをこれらの展覧会には問われているとも言え、その点甚だ心許ない。10年という期間、しかも新しい作家が次々に現れ、

常に新しい問題が提起される状況にあった時代の動向を一つの展覧会で包括的にとらえる困難は、これらの展覧会の企画者も予め認識していたことだろう。更に企画した学芸員が同時代を体験していたか否かという違いもある。

同じ80年代といっても二つの展覧会の構成が大きく異なっていることに、その点は端的に現れている。姿勢の違いが最も顕著にあらわれるのは出品作家と作品の数だろう。「起点」はその時代を現代に続く表現の起点ととらえ、その特質を端的に抽出することを試み、19作家の67点を展示する。他方「ニュー・ウェイブ」は1年を数名の作家で代表させて10年の歴史を概観しようとし、65作家の92点を選んでいる<sup>註50</sup>。両展どちらも選ばれている作家は13人であり、さらに谷新氏が双方に論考を寄せている。

思い起こせば80年代は、その到来以前から来るべき未来として待望される気分があり、またその終結を待たずに、この時代は回顧されるべきである<sup>註51</sup>と要請されていたように思う。進行中の時代のさなかにあっても、それまでとは違う事態の中にいることが広く意識されていたわけである。にもかかわらずその回顧が十分に行われてこなかったのは、やはりその時代の多様性を把握することが困難だったからに他ならないだろう。その多様性はひとり美術のみのもではなく、思想からポピュラー・カルチャーにいたるまで、時代自体がはらむものであった。その点について、「ニュー・ウェイブ」展はカタログにおいて出品作を1年ごとに区切るページに、その年に起こった事象を散りばめ、時代の様相への参照を示唆する。残念ながらその読解を進めるまでには至っていないが、それは高望みというのだろうか。ともあれ80年代という時代は毀誉褒貶激しく語られることはしばしばであったにもかかわらず、実作によって振り返られる機会を持たなかった。特に関西においては、関西ニュー・ウェイブと呼ばれた一群の作家をはじめ、80年代の動向は語られることのみ多く、作品で回顧されるまとまった機会を持たないままである。

ニュー・ウェイブの台頭を促す大きな場であった兵庫県立近代美術館の「アート・ナウ」展は、1990年に「関西の80年代」をタイトルに掲げるが、展覧会の内容は80年代に活躍を始めた作家の新作展であり、図録に80年代の動向が年譜としてまとめられているものの、展覧会としては時代を回顧し検証する内容ではなかった。

ところで84年には赤瀬川原平の著作『東京ミキサー計画』が、続いて翌年、『いまやアクションあるのみ』<sup>註52</sup>が上梓されている<sup>註53</sup>。いずれも81年から翌年にかけて雑誌に連載された記事に大幅な加筆修正を行ったものだ。その81年には東京国立近代美術館で、数年後に東京都美術館で1960年代を取り上げた展覧会が開催されている<sup>註54</sup>。いずれの展覧会においてもハイレッド・センターや読売アンデパンダン展に関連する作品が取り上げられており、赤瀬川自身も出品者としてこれらの展覧会に関わっている。

東京都美術館は60年代展の前後に50年代展と70年代以降の動向を紹介する展覧会も企画しており、80年代は一つの回顧の時代、「戦後」に生み出された「現代美術」の客観的な対象化が始まった時代と見ることもできよう<sup>註55</sup>。80年代に活動を始めた当時の若手作家にとって、海外の動向と自国の過去の美術はともに異質な他者として現れているのだとも言える。

赤瀬川は、展覧会に60年代当時の熱気を伝える作品が出品されていないことや、熱量の保存の困難に触れるが<sup>註56</sup>、同様の事情は時代を回顧する展覧会には不可避の問題だろう。であるならばむしろ、体験に基づく事象に焦点を絞って語られるアンバランスな複数の歴史が集積され、面としての時代像を形成することに期待するべきだろうか。

二つの80年代展には共通する点もある。ともに出品作の70%ほどが開催館をはじめとする美術館の収蔵作品で占められており、作家からの出品は25%ほどなのだ。これは同時代の作品への関心と収集活動を各地の美術館が行ってきた成果と言って良いだろう。

包括的な回顧展は困難であっても、それら収蔵作品を通してそれぞれの館の文脈で80年代の作品も解釈され鑑賞されていくだろう。

1968年に焦点を当てることで、その時代を切り取った『1968年 激動の時代の芸術』のような切り口が、80年代においても可能かもしれない<sup>(註5)</sup>。むしろこれらの展覧会を起点として、今後80年代の様々な局面についての再考が進むことが期待される<sup>(註6)</sup>ところである。

(註1) 「起点としての80年代」金沢21世紀美術館、2018年7月7日―10月21日、高松市美術館、静岡市美術館に巡回／「ニュー・ウェイブ 現代美術の80年代」国立国際美術館、2018年11月3日―2019年1月20日

(註2) 資料も含めてカウントした。

(註3) 赤瀬川原平『東京ミキサー計画・ハイレッド・センター―直接行動の記録―PARCO出版局、1984/同『いまやアクションあるのみ!』(説売アンデパンダン)という現象』筑摩書房、1985

(註4) 「1960年代―現代美術の転換期」東京国立近代美術館、1981年、京都国立近代美術館へ巡回／「現代美術の動向II 1960年代―多様化への出発―」東京都美術館、1983年

(註5) 「九五〇年代―その暗黒と光芒―現代美術の動向I」東京都美術館、1981年／「現代美術の動向III 1970年以降の美術―その国際性と独自性―」東京都美術館、1984年、こに「絵画の嵐・1950年代・アンフォルタル/具体美術/コブラ」国立国際美術館、1985年や和歌山県立近代美術館での関西の作家シリーズを加えることもできよう。

(註6) 赤瀬川『いまやアクションあるのみ!』205―214ページ

(註7) 「1968年 激動の時代の芸術」千葉市美術館、2018年9月19日―11月11日、北九州市立美術館、分館、静岡県立美術館へ巡回